

# 週刊センターニュース

No.208



第208号(2008年5月27日)毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 共同学習会のご案内

### 第184回

日時: 5月30日(金) 16時30分~18時 (いつもの曜日と異なります)

会場: 角間キャンパス総合教育1号館 2階大会議室

報告者: 木越 治(人間社会研究域 歴史言語文化学系)

青野 透・西山 宣昭・堀井 祐介(いずれも大学教育開発・支援センター)

テーマ: 大学・学問論1 - 人間社会学域共通科目の検討-

内容: 本年度後期から、「大学における学問の淵源をたどりつつ、大学における学問は全体としてどのように構想されているか」という問題について、カリキュラムの面から考え、世界各地における大学の歴史や大学がいま直面している諸問題を解説しながら、金沢大学の歴史、さらに人文社会学域の学問について考えていく」ことを授業の目標とする、人間社会学域共通科目「大学・学問論」が開講される。学域・学類化による新カリキュラム=教育改革の象徴的な科目と位置づけられるものである。授業担当者(学域教員、図書館職員、および大学教育開発・支援センター教員)を中心に、科目目標に即して、講義内容等について具体的な検討を行う。

第一回として、科目コーディネーターの木越教授による科目企画趣旨の確認ののち、大学教育開発・支援センター教員が、主として大学論を中心に、24日・25日に東北大学で開催された日本高等教育学会での最新の大学論の紹介も交えて、報告する。人間社会学域での授業担当者に限らず、広く、大学論・学問論に関心をもつ教職員・院生・学生の参加を期待したい。

### 第185回

日時: 6月5日(木) 16時30分~18時

会場: 角間キャンパス総合教育棟1号館2階大会議室

報告者: 西山 宣昭、青野 透(大学教育開発・支援センター)

テーマ: FD研究の現在(その2)

趣旨: 6月7日、8日の両日、目白大学で大学教育学会第30回大会が開催される。西山と青野は、この大会の中で企画されているラウンドテーブル「理系基礎教育の組織化とFD」および「FDのダイナミクス(その3)」でそれぞれ口頭報告を行う。今回の共同学習会では、学会報告に先立ち、学内で報告し、それをめぐり議論を行う。一般教育学会を前身に持つ当学会は、従来より広範な分野の大学教員が参加する「大学教員としての自己研究活動」を主力として活動を行っているが、FD義務化を踏まえて、より活発な議論が予想される。本共同学習会では、両報告を議論の材料として、学内の多くの教員により、FDとして今後何をすべきかについて意見交換されることを期待したい。

## 第8回東北大学高等教育フォーラム参加報告

5月16日(金)に、東北大学高等教育開発推進センター主催の標記フォーラム「高校教育と大学入試:『AO入試』の10年を振り返る - 接続関係の再構築に向けて - (新時代の大学教育を考える [5]、於 川内北キャンパスマルチメディア棟)に参加した。

基調講演として、倉元直樹氏(東北大学高等教育開発推進センター准教授)から「入試の多様化と高校教育 学力重視のAO入試を掲げて」、大久保貢氏(福井大アドミッションセンター教授)から「草の根の高大連携活動とAO入試」の各報告がなされた、

AO入試は高大接続関係の変化の象徴として捉えられ、導入当初(東北大の場合、平成12年度)一般入試とは異なる視点で学生を総合的に判断できるという積極面も評価された。しかし近年はAO入試に対する批判が強まりつつあり、偶然のタイミングとはいえ九州大の一部でのAO入試廃止をはじめ見直しの動きが広がっている。基礎学力不足(低下) 学生の青田買い、(定員割れ)私大での安易な利用といった理由があり、学力度外視のAO入試の拡大に倉元氏も警鐘を鳴らす。東北大のAO入試は、一般入試との一貫性のあるコンセプト、つまり「学力重視」であることが共通であり、そのことはAO不合格・一般入試再挑戦合格者の多さ(例年100名以上)に表れているという。またオープンキャンパスを中心とした高大連携と連動させ、入学後の目標発見や日常の学習動機付けのきっかけをオープンキャンパス(国公立大で参加者は日本一)掴み、AO入試の受験とその準備努力が一般入試にもつながる形になっているようである。こうした東北大型AO入試が、当事者とくに東北地方の高校・高校生にはすさまじい影響力を及ぼしていることがアンケート調査結果からも明らかになっている。他方では地理的限界といった東北大の入試の限界も指摘された。

大久保氏の報告では、継続的かつ長期的視野に立った課題研究型の指導にもとづき(物理・化学系のSPP実施) 高校までの学びと大学での学びをうまく橋渡しすることをねらっており、実際にアンケート結果からもその成果が表れていることを示した。

の現状報告「高校は入試の多様化とどう向き合ってきたか?」においては、渥美健氏(静岡県立磐田南高教諭) 出野俊之氏(福井県立敦賀工業高教諭) 佐々木裕氏(青森県立八戸高教諭)の3氏からそれぞれ高校の特色や地域性を反映した形でAO入試に対する立場が出て、興味深いものであった。渥美氏は、3年間の指導結果の延長にある大学入試という位置づけの下に、(AO入試時期の)秋に決めるのは早すぎる、高校側として目標を絞らないと生徒の力が伸びないなどの理由からAO入試に対する消極的な意見を述べた。佐々木氏からは、教師側が生徒や保護者に対し東北大学を(まずは)第一志望とすることを薦めており(AO入試に肯定的な立場) またそうした体制が整いやすい条件にあると述べていた。

東北大は、同条件ならモチベーションの高い生徒を優先するための方法の一つとして、福井大は大学教育の先取り履修(準備教育)をねらっているわけだが、いずれにしても志願者のモチベーションを高めることにAO入試の目的の一つがあることは共通している。日本のAO入試の端緒である慶応大SFCのAO入試推進責任者であった藤澤氏の発言から、その背景として 全く新しいタイプの2学科に適合する(ある意味で)特殊な生徒の獲得 従来の慶応大受験お得意様とは違い慶応大で新しい事を試みたく、しかもそれに対応できるだけの十分な学力を有する生徒を求めていたとされ、スキームは一貫していることが理解できる。

ただフォーラムの最後で、高校(教師)が嫌っているのは、AO入試の時期ではなく、その選抜基準の不明確さにある(大久保氏)といった指摘は、やはり検討すべき部分であると思えた。

(文責:評価システム研究部門 渡辺 達雄)